



2021年 10月4日 月曜日
(令和3年)

「特定技能」で働く

越谷 千屋 養豚場に外国人実習生

「日本で言葉や技術などを学んで、将来的には母国と日本をつなぐ仕事をしたい」。ネパール国籍のスナリ・ブラビンさん(21)と同じくクスマ・アソクさん(25)は越谷市の養豚業「千屋」の茨城県坂東市内の養豚場で働く傍ら、日本語の勉強に励んでいる。

(吉谷篤樹)

ブラビンさんは、2019年に留学生として来日。翌年日本語学校を卒業した後、人手不足が深刻な産業分野に



茨城県内の養豚場で働くスナリ・ブラビンさん(右)とクスマ・アソクさん—茨城県坂東市

宿泊施設での就職を目指して専門学校へ進学を希望していたが、新型コロナウイルスの影響で通学しながら就労できる働き口が減少したことを受けて進学を断念。現在は家事を分担しながら生活を共にしている。

コロナ下、慣れない異国で生活することの難しさは想像に難くないが、それでも2人はテレビ電話を使って家族と頻繁にコミュニケーションを取り、自分たちよりも母国の家族を心配する。ブラビンさんは今はまだ余裕はないが、生活が落ち着いたら家族に送りをしたい生活を送ってみたい」と笑顔で話す。

受け入れ先の千屋の染谷宗一社長は「大変だと思っが、仕事には真剣に取り組んでくれている」とした上で「当たり前だが、他の従業員と対応は変えない。何でも相談できる家族のような関係性を築いて、働きやすい環境を日々構築している」と語った。

2人は例外ではなく、新型コロナウイルスは外国人就労者の情勢にも大きな影響を与えている。2人の就職を支援した外国人材紹介などを手掛けるアイメイドアルファ(東京都新宿区)人材事業部の佐藤英則次長によると、昨年から今年にかけて「特定技能」の在留資格を取得する在留者が急増しているという。新型コロナウイルスの影響で海外への渡航が制限されたことが主な要因で、21年3月末時点の取得人数は2万2567人に上り、20年同月末の3987人と比較すると約5.6倍となった。

佐藤次長は「日本語学校などを卒業したものの渡航制限で帰国できなくなった方や、今回の2人のように金銭的に進学できなくなった方が在留資格を変更する形で取得しており、受け皿として機能している」と分析した。

ブラビンさんは現在、日本語能力試験(JLPT)の中でも専門学校へ入学するために必要で、日常的な日本語を話すことができるレベル「N3」の資格試験勉強に取り組んでいる。宿泊施設での仕事に就くという夢をかなえ、将来は自身の経験で母国に貢献したいという。染谷社長は「彼には選択肢がある。ここで長く働いてくれるのはうれしいが、夢をかなえてくれる方がいいと思う」と2人の夢へ背中を押す。